

*Offprint from:*

『香川孝雄博士古稀記念論集・佛教学浄土学研究』京都：永田文昌堂, 2001, pp. 95–103.

*KAGAWA Takao Hakase Koki Kinen Ronsyū — Bukkyougaku-Jōdogaku Kenkyū*  
[*Studies on Buddhism and Pure Land Buddhism: Felicitation Volume in Honour of Dr. Takao KAGAWA on the Occasion of his 70th Birthday*], Kyōto: Nagata Bunsōdō, 2001, pp. 95–103.

工藤 順之

「*Mahākarmavibhaṅga* A 写本付随の部分筆写貝葉について」

Noriyuki KUDO

"An Extra Folio Included in the Bundle of MS[A] of the  
*Mahākarmavibhaṅga*"

*Mahākarmavibhāṅga* A 写本付随の  
部分筆写貝葉について

工 藤 順 之

2001年3月発行  
香川孝雄博士古稀記念論集  
佛教学浄土学研究抜刷

# Mahākarmavibhaṅga A 写本付随の 部分筆写貝葉について

工 藤 順 之

## はじめに

シルヴァン・レヴィ (Sylvain Lévi) による1932年出版の『マハー・カルマ・ヴィバンガ』 (*Mahākarmavibhaṅga*, abbrev. MKV.) とその注釈書とされる『カルマ・ヴィバンガ・ウパデーシャ』 (*Karmavibhaṅgopadeśa*) は、既に知られているように、二本の写本に基づいて校訂された。前者はレヴィが名付ける写本Aと写本Bという二本に、後者は写本Aの MKV に連続して筆写されるテキストに基づいている。現在はネパール国立古文書館 (National Archives, Nepal) に所蔵されるそれら二写本を再読する作業の中で、写本校訂上考慮すべき幾つかの事実が明らかになったが<sup>1</sup>、とりわけレヴィが上記二写本の現存葉数と報告する枚数以外にそれぞれのバンドルに付属して保存されている数葉が実は MKV を伝える別写本であるという事実が興味を引く。

写本の発見とその後レヴィが実際には何に基づいて校訂作業をしたかに関しては既に述べたことの繰り返しになるが、ここで概括しておく。レヴィ自身は写本Aを発見した後、その転写本作成をネパール人バンディット、ヘムラージ・シャルマ (Hemrāj Sharma) に依頼し、しばらくしてその転写本とレヴィのネパール出国後に新たに発見された写本Bの転写本を併せて受け取る。それらに基づいてレヴィは校訂テキストを出版するが、如何なる理由からかB写本束に保存されてきた二葉がレヴィには知られなかった。その後の写本再検討によって、その二葉が校訂本の基となった二写本とは異なる読みを残す写本の一部であることが明らかになった<sup>2</sup>。更に写本Bのみならず、現在所蔵されている状態では、A写本にもこれまでその葉数として知られてきたもの (本来は78葉の写本。その内第49と第69葉が失われ、76葉が残る) 以外に、A写本には属さない二枚の貝葉が付随していることが判明した。その二葉の内、一葉はMKVの一部を筆写してあるもの、もう一葉は *Vajrasūci* を抜粋して筆写してあるものである<sup>3</sup>。

## 1 MKV 筆写の一葉

この一葉は文字筆写部分全体が擦れによって薄くなっており、左四分の一は文字としての形を読みとることが極めて困難で、辛うじて文字が書かれていたと推定できるインクがあるに過ぎない。上辺・下辺共におそらくは水の染み跡が残り、上辺は繊維の方向に沿って部分的に欠損しているが、第一行目の文字筆写部分には損傷はない。Nevāri 文字で書かれており、その文字はA写本に類似しているが、同一筆写者の手によるものとは断定できない。片面に三行分の文のみが書かれ、その裏面には何も書かれていない。まず、そのローマ字転写を示そう<sup>4</sup>。

1 . . . . .<sup>5</sup> [cādivarddhasatake] sūtram<sup>6</sup> āryapūrṇṇena saurppārake  
nagare pañcopāsakaśatāny abhiprasāditāni | candanamālaś ca vihāraḥ kārītaḥ  
yathā ca;

2 . . . . . [ñca bhikṣuśataiḥ sārdham vihāyasā] tatra gato ja○nakāyaś cā-  
bhiprasāditāḥ api [ca] kim ekaikasya bhikṣor nāmagḥanena<sup>7</sup> kṛtena yataḥ  
prati bha

3 . . [vā] . . . [pītarāḥ pañca sthānāni pra]tyāsaṃsamā○nāḥ putram icchati<sup>8</sup>  
ācāryopādhyāyās tu kāruṇyā<sup>9</sup> ni[rvāṇa]gāmināḥ dharmam deśayanti |

和訳<sup>10</sup> : (例えば) また, Ādivarddhaśataka<sup>11</sup> における経に〔説かれるが如くに。即ち〕聖なるブールナ〔尊者〕がシュールパーラカの城邑において五百人の在俗信者を入信させた。そして旃檀で組まれた僧院<sup>12</sup>が建立された。そうして(世尊は五)百人の比丘と共に空中を飛んでそこに行き、民衆を入信させた。

しかし、〔これ以上〕一人一人の比丘の名を挙げて説明する必要があるか。何故なら、世(尊が説くように。)「父母たちは五事<sup>18</sup>を期待しつつ息子を望む。しかし阿闍梨・和尚は慈悲から涅槃に赴く者の法を教える」と。

この一葉に筆写されている部分を含む一節をA・B写本と現行のレヴィ本から抜き出して示そう。(対応している部分に下線を付してある。また、太字にしてあるのはA写本とこの一葉にない文章である。)

MS[A] 38recto1-verso2:

(38recto1) yathā cāryamahemdr⟨e⟩<sup>14</sup>na si⟨m⟩haladvipe vibhīṣaṇaprabhṛtayo  
rākṣasāḥ sama(38r.2)ye sthāpitāḥ | deś{{c}}aś cābhiprasāditaḥ | yathā cādi;  
○varddhaśatake sūtram āryapūrṇṇena saurppārake nagare pañcopāśakaśatāny  
abhiprasādītāni | ca;(38r.3)ndanamālaś ca vihāraḥ kāritaḥ | yathā ca Bha-  
gavān\* ○ pañca bhikṣuśataiḥ sārddham v⟨i⟩hāyasam tatra gato janakāyaś  
cābhip. sādita⟨h⟩<sup>15</sup> | api ca | kim ekai(38r.4)kasya bhikṣo⟨r⟩ nāmag. [h]. [n]e-  
[n]. k. tena yataḥ p[r]ati Bhagavā○n mātāpitarāḥ pañca sthānāni prat-  
yāśamsamānāḥ putram i[c]. . . [i] + + . [o]pādhyāyās tu kārūṇyā(38r.5)[n]  
[n]. [i]r[v]. . . . [i] + + + + + + + + + + raṇena mātā-  
pitṛbhya ācāryopādhyāyāḥ prativīśiṣṭatarā i[t]i + + + + + + + + ..  
vān mama ca bhikṣa(38v.1)[v]. [v]. [c]. . . r. . . + + + + + + .r.  
[sā]. . . + . [h] [dha]rmm. sa(m)ghe mātāpitṛṣu ācāryopādhyāyeṣu paraḥ  
prasādaḥ kāryaḥ tad vo + + + + + + .. [tr]a[m] hitāya svadhyā(38v.  
2)yeti ||

MS[B] 20verso6-21recto6:

(20verso6) yathā āryamahendreṇa siṃhaladv⟨i⟩<sup>16</sup>pe vibhīṣaṇapra(21r.1) +  
+ + + + .. samaye sthāpitā deśaś cābhipra{{dā}}sāditaḥ || yathā cāddh-  
yarddhaśatake sūtre āryapūrṇṇena sū⟨r⟩pārake pañcopāśakaśatāni | abhipra-  
sādītāni candanamālaś ca vihāraḥ kā(21r.2) + + + + + [ga]vān pañca-  
bhiḥ bhikṣuśataiḥ sārddham vihāyasā tatra gato ja○nakāyaś cābhiprasāditaḥ  
| api ca kim ekaikasya bhikṣoḥ nāmagrahanena kṛtena yataḥ Bhagavān\*  
**parinirvā(21r.3) + + + ntare yaḥ kaścid abhivinito bhikṣu vā bhikṣuṇi  
vā upāsako ○ vā upāsikā vā sarve te bhikṣubhir eva vinitāḥ | yaś ca yenā-  
bhiprasādītāḥ sa tasyācāryopādhyāyāś ca eta(21r.4) + + + ta Bhagavān\***  
mātāpitarau pañca sthānāni pratyāśamsamānāḥ putram i○cchati | ācāryopā-  
dhyāyās tu kārūṇya nirvāṇam dharmam deśayati | anenāpi kāraṇena mātā-  
pitṛbhyaḥ acā;(21r.5) + + dhyāyaḥ prativīśiṣṭatarā iti || ata evam āha Bha-  
gavān\* mama ○ bhikṣavo vacanam śraddadhānānāniḥ buddhe Bhagavati para-  
prasādaḥ kāryaḥ dharme samghe mātāpitṛṣu ācāryopā(21r.6) + + + + raḥ  
prasādaḥ kāryaḥ tad vo bhaviṣyati | dirgharātram hitāya sukhāyeti || ◎ ||  
idaṃ karma deśāntaravipakṣam ||

Lévi p. 63, 1. 2-p. 64, 1. 9:

[p. 63, 1] yathā ācāryaMahendreṇa Siṃhaladvīpe Vibhiṣaṇaprabhṛtayo rākṣasāḥ samaye sthāpitāḥ deśās cābhiprasāditaḥ. yathā cādhyardhaśatake sūtra āryaPūrṇena Śūrparake nagare pañco[p. 64]pāsakaśatāni abhiprasādītāni. candanamālaś ca vihāraḥ kārītaḥ. yathā ca Bhagavān pañcabhir bhikṣuśataiḥ sārđhaṃ vihāyasā tatra gato janakāyaś cābhiprasāditaḥ. api ca kim ekai-  
kasya bhikṣor nāmagrahaṇena kṛtena yato Bhagavān parinirva . . . ntar yaḥ kaścid vinito bhikṣur vā bhikṣuṇi vopāsako vā upāsikā vā sarve te bhikṣu-  
bhir eva vinitāḥ. yaś ca yenābhiprasāditaḥ sa tasyācāryopādhyāyaś ca eta  
. . . ta Bhagavan mātāpitaraḥ pañca sthānāni pratyānuśamsamānāḥ putram  
icchanti. ācāryopādhyāyāś tu kāruṇyān nirvāṇaṃ dharmāṃ deśayanti. ane-  
nāpi kāraṇena mātāpitṛbhya ācāryopādhyāyāḥ prativiśiṣṭatarā iti. ata evam  
āha Bhagavān. mama bhikṣavo vacanaṃ śraddadhānair Bhagavati paraḥ  
prasādaḥ kāryaḥ dharme saṃghe mātāpitṛṣv ācāryopādhyāyeṣu paraḥ prasā-  
daḥ kāryaḥ. tad vo bhaviṣyati dirgharātraṃ hitāya sukhāyeti. idaṃ karma  
deśāntaravipākam.

## 2 A・B 写本との関係

さてMKV校訂本の基となった二写本とこの一葉を比較すれば、付属貝葉の一節が写本Aに伝わる文章と一致していることは明白であろう。A写本ではB写本に見られる一文（ローマ字転写では太字にしてある部分<sup>17</sup>）が見いだせないが、この一葉も同じくその部分を欠く。これが脱落であるとすればその原因は Bhagavān という語に始まる文が連続するために起きた筆写者の eye-skip によるものであらうと思われるが、しかし世尊の涅槃後に教化されたものにとっての阿闍梨・和尚の優位性を説かずとも内容的には続きそうであり<sup>18</sup>、チベット訳にもこの部分はなく、B写本での挿入である可能性が高い<sup>19</sup>。

また、その部分直前に見られる表現も “yataḥ prati” とあり、A写本とこの一葉の読みは一致するが、B写本にはない。この prati という語は前後につながらず、B写本にも相当する部分が見出せない。この前後の文章から推測すれば、これは後続する prativiśiṣṭatarā の2文字分に眼が飛んでしまったのではないかと思われる。仮に、B写本のみにある文章が元々無かったとすれば、2行下の prati を写してまた本

来続くべきその上の行に戻ったかもしれない。或いは、B写本のみにある文章が元々あったとすれば、その場合には Bhagavān 直前で3行下の文にある prati を写した後、その一行上の行（即ち一行飛ばした2行下）に戻って筆写が続けられた。その為に、一行分が欠落したとも想像出来る。いずれにせよ “yataḥ prati Bhagavān” とあってその後は別の文が続いている以上、前置詞 prati を Bhagavān につなげるのは構文上変であり、別な所から prati が読み込まれたと考えざるを得ない。

更に、この一葉で筆写されている最後の文 “ācāryopādhyāyās tu kārūṇyā ni[rv-āṇa]gāmiṇaḥ dharmam deśayanti” も、A写本は nirvāṇa に続く二文字目に、欠損の為にその基字を読みとることが出来ないが、それに付けられた母音記号 i が辛うじて読める以上<sup>20</sup>、この一葉に見られる nirvāṇagāmiṇaḥ という語が筆写されていたであろうことは間違いないであろう。この読みはB写本にはなく、従ってレヴィのテキストにも採用されていない。

### 3 一葉残存の理由

テキストを作りうるだけの量を持つ写本が二本だけでは写本伝承上に系統を区別してみてもあまり意味をもつとは思えないが、この一葉（以後D写本とする）がA写本のテキストと同じである点で筆写に関して両者がかなり近い距離にあったことは明確である。その近さをどう判断するかであるが、そのシナリオを考えてみよう。矢印左から右の写本が写されたという関係を MS[X]→MS[Y] とする。

1. MS[A]→MS[D]
2. MS[D]→MS[A]
3. \*MS→MS[A, D]
4. \*MS1→MS[A]; \*MS2→MS[D]

第一シナリオでは、現存するA写本が貝葉そのものの欠損による判読困難な部分を有している以上、この貝葉はAの物理的欠損が生ずる前に筆写されていなければならない。しかしこの必要条件を満たしたとしても、何故この部分だけが筆写されているのか？；

第2はこの一葉をA写本筆写の元となった写本の一部とするシナリオであるが、そうするとこれを持っていたはずの写本全体の所在が問題となる。A写本に付属して保

存されている理由もつかない。また写本の筆写方法から言っても、片面3行ということはノーマルなことではない；

第3は両者の元となった写本の存在を想定するものであり、両者の読みの一致を説明する点に限れば好都合なシナリオである。しかし、これもこの一葉が独立した写本の一部であったとして理解する限り片面3行であることの説明がつけられない；

第4はAの欠損部分を補充するために別の写本或いは当該箇所を持つ別テキストの写本から写されたというものである。しかしこれもA写本の欠損部分の分量を考慮すると、A写本にはこの貝葉に筆写された一節が終わってからも更に欠損部分があり、またその貝葉裏の補充もされていない。つまりAの欠けている部分を補填しようとしているものとしては不十分なのである。

わずかな資料からでは十分な説明は付けられないが、それはこの一葉で片面3行のみのテキスト筆写がされていることがネックになる。貝葉をこうした筆写の仕方を用いることはあり得ないことではないが決して当たり前の出来事ではないのだから、この貝葉が別箇の写本束に属していたという可能性はかなり低く、やはりA写本を写すか或いはその補充を意図したものではなかろうか。

#### 4 筆写された内容

さてこの一葉が何らかの意図のもとに筆写されたのは事実であり、現行のMKVに一致している以上MKVを写した貝葉であることは確かであるが、ここに筆写されている文章が単独で抽出されるに値する内容であるのかどうか。

この一葉に残される内容は、MKVで説かれる業報の分類の内、他国に行くことの業の異熟 (deśantaravipāka) を説く一節の最後の部分になる。在家者に対しては父母にとるべき態度を説き、出家者には阿闍梨・和尚を尊ぶことを教え、更にそれら二つの供養には大きな相違があることを示し、阿闍梨・和尚に対するものの方が優れているということを述べる。そうした事柄に纏わる因縁譚を幾つか引用しながらその最後に仏弟子たちによる他国住民の改宗が言及され、プールナのシュールパーラカ教化の出来事が語られる。

しかしこの一葉に残される限りのプールナの事跡 (シュールパーラカで五百人を改宗させ、旃檀精舎を建立した。そこに世尊がやって来る) だけでは本来説くべき他国に行くことの業報という内容とは結びつかない。また父母に対する態度を説く内容にもそぐわない。少なくとも『プールナ・アヴァダーナ』の内容を踏まえていること



(尤も仏教徒にとっては有名な物語であるが<sup>21)</sup>、他の物語によって予め述べられている内容と同様の趣旨が意図されていると理解できるような文脈がなければこうした短い言及は意味をなさない。

またプールナの事跡の部分だけに抽出の必然性があるのではないかという予想は筆写されている部分にある “*api ca kim ekaikasya bhikṣor nāmagrahaṇena kṛtena*” という文によって決定的に否定される。一々の比丘の事跡を挙げているからこそ、これ以上名前を列挙する必要はないというのだから、この文が挟み込まれている点からも MKV のこの一節に引用・要約される一連のエピソードの一つがプールナの事跡の部分になっていることが明白なのである。

従って、一つのアヴァダーナに語られる出来事の一部だけを羅列する部分は他の複数の物語が語られている中で意味を持ってくるのだから、目下の貝葉はこの部分だけを抜き出す意図の下に筆写された一葉ではない。

## ま と め

なぜこの一葉だけがあるのかということについては結局のところ断定的に言えることは何もない。片面3行の一葉のみという中途半端な姿をみる限り、そしてA写本のバンドルに含まれている点からも、この一葉はA写本に直接関係するものであり、A写本を写したかそれを補った一葉である可能性が高い。無論、部分的に筆写された別写本の最後の一葉であるならば、この片面3行という在り方でも十分あり得る。その限りにおいて、別の独立した写本の一部である可能性も完全には否定されたわけではない。もしそうであるならば、仮定に仮定を重ねた上の希望的観測として、この一葉の存在は今まで確認されている他にも MKV の写本が何処かに眠っていることを仄めかしているのではないか。

### 註

- 1 テキスト上の問題点については、その一部を下記の序論に指摘した。辛嶋静志・工藤順之・吹田隆道「Mahākarmavibhaṅga と Karmavibhaṅgopadeśa (1): ネパール国立古文書館所蔵の写本」『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第2号、93-128頁、(序論は93-103頁)。また本稿で用いる資料の詳細は上記拙稿の Bibliography を見られたい。
- 2 Takamichi FUKITA (吹田隆道) [1990] “Sanskrit Fragments of the *Karmavibhaṅga* Corresponding to the Canonical Tibetan and Chinese Translations”, in *Annual of Buddhist Studies [The Bukkyō Bunka Kenkyūsho Nenpō]*, No. 7-8, pp. 1-23.
- 3 註1に挙げた拙稿では二葉とも「おそらくは *Vajrasūcī* に関係すると思われる」としたが、ここで訂正したい。一葉は確かにそうであるが、本稿で扱うものは余りにも文字部分が擦

れていて極めて読みにくかったこと、また本文で述べるように片面3行の貝葉であるために *Vajrasūci* 筆写の一葉に連続するものとの判断をしてしまった。尚、後者については紙幅の都合上別に取り扱すが、これも片面のみに *Vajrasūci* を抜粋筆写し、もう片面は十善業道の項目をただ列挙してあり、メモ代わりとして用いられたものと予想出来る。

- 4 ネパール系写本の正書法上の特徴に関しては、上記註1の Appendix を参照のこと。ここではそれらについては一々注を付さず、語形として読むべき点を示すに留める。
- 5 この部分は現状では文字の痕跡と思えば思える程度の跡があるばかりで、汚れと言われればそうかもしれない。不明瞭文字数は二行目の文字数によって計算しただけである。
- 6 For *sūtre*.
- 7 For *grahaṇena*.
- 8 Read *icchanti*.
- 9 For *kāruṇyān* (>*kāruṇyāt* sg. Ab.).
- 10 丸括弧内は写本に欠けている部分、角括弧内は補足である。
- 11 この文献名は不明。写本Bでは *addhyardhaśatake* とあるが、文字としてどちらかが書き間違えたという形ではない。明らかにA写本とこの一葉はB写本と異なる表記をしている。Lévi [1932], p. 63, footnote 2 の前半を参照のこと。
- 12 岩本裕 [1974, p. 304] は「旃檀造りの堂舎のある僧院」と訳す(『佛教聖典選第一巻・初経経典』, 読売新聞社)。プールの因縁物語では、例えば有部系のものとしては *Divyāvadāna*, No. 2: *Pūrṇāvadāna*, 42, 27-43, 1 (Cowell and Neil ed.): *tata āyuṣmān Pūrṇo bhrātuh kathayati. yasya nāmnā vahanam saṃsiddhayānapātram āgacchati tat tasya gamyaṃ bhavati. tvam eṣaṃ baṇijaṃ ratnasamvibhāgaṃ kuru. aham anena gośrīṣacandanena Bhagavato 'rthāya candanamālaṃ prāsādaṃ kārayāmi* とあり、対応する漢訳『根本説一切有部毘奈耶藥事』には「我今以此牛頭栴檀。為佛造作栴檀精舎。彼兄便即取其宝物。分與商人。其牛頭栴檀円満欲為佛建立精舎」(T. 24, 13b20-23)となる。*candanamāla* という語の表す意味・用例については Lévi [1932], p. 63, footnote 2 の後半を参照のこと。
- 13 MKV で説かれる五事は次の箇所にある。Lévi [1932], p. 59, 11-18 (MS[A]36r. 2-v. 1; MS[B]19v. 3-5): *ucyate. mātāpitarāḥ pañca sthānāni pratyāśamsamānāḥ putram icchanti. samvardhito no vṛddhībūtān pālayiṣyati kāryaṃ ca kariṣyati dravyasvāmī ca bhaviṣyati. kālagatānāṃ ca pitṛpiṇḍaṃ dāsyati. kulavaṃśāś ca cirasthitiko bhaviṣyati. imāni pañca sthānāni pratyāśamsamānā mātāpitarāḥ putram icchanti. naivamācāryopādhyāyāḥ. kevalam eva kāruṇyaṃ puraskṛtya katham asyā nādikālapravṛttasya saṃsāracakrasya paryantaṃ kuryād iti.* この五事については当該部分を並川孝儀(『*Mahākarmavibhāṅga* 所引の経・律について』『佛教大学研究紀要』第68巻, 1984, 53-76頁)がその典拠を検討しており(pp. 62-66), またこの部分に続いて説かれる *vinaya* からの引用についても扱われている(pp. 56-58)。
- 14 元は *dri* となっているが、母音記号 *e* が上部に加えられている(本来の母音記号 *e* はこの文字では左側に縦に弧を描いて書かれる)。
- 15 このヴィサルガは *tā* とある文字の母音記号上に重ねて書かれてある。従って、*tā* を *taḥ* と読み替える指示と見なす。
- 16 元は *dvi* であるが、左の母音記号 *i* が消され、右側から *ī* の記号が書かれる。
- 17 ここは全く復元が出来ていない。敢えて和訳しておけば次のようになろう。「何故なら、世

尊は般涅槃（弊してしまった。その）後に教導されたものは比丘であれ、比丘尼であれ、優婆塞であれ、優婆夷であれ、誰であっても、全て諸比丘によって教化されたのである。そうしてその者を入信せしめた人物がその者にとっての阿闍梨・和尚なのである。（そこで）世尊は（このように説く。）「ここは世尊亡き後の教団内秩序に言及しているのであろうか。阿闍梨・和尚に対して彼らを敬い、付き従うべきであるとの言葉は多くの文献中に見られるが、事が入信ということになると、両者を同等に扱うわけにはいかない。阿闍梨 (ācārya) と和尚 (upādhyāya) が併記されているが、本来的な両者の役割分担は在家者が出家・受戒する際に彼（女）らを受け入れ、指導・監督するのが和尚であり、この和尚が非可逆的な不在においてその代理を務めるのが阿闍梨である。両者の僧団内における役割の違いそして後代になって阿闍梨が「シャカムと同等の絶対権威ともなりうる」（p. 34）ことに関しては佐々木閑「和尚と阿闍梨」『花園大学文学部研究紀要』第29号，1997，1-43頁を参照のこと。（この論文はその後『出家とはなにか』大蔵出版，1999，第八章に吸収されるが、同書の性格上一部が削除されている。）

- 18 この一節を締め括る世尊の言葉はこの業の果報を扱う別の箇所でも述べられている。 Lévi [1932], p. 56, 14-21 (MS[A]33v. 5-34r. 2; MS[B]18r. 3-6): atha Bhagavān prāptakālam bhikṣūn āmantrayate. syād evam bhikṣavo yuṣmākam anyaḥ sa tena kālena tena samayena Maitrāyājño nāma sārthavāhaputro babhūveti. naivaṃ draṣṭavyam. ahaṃ sa tena kālena tena samayena Maitrāyājño nāma sārthavāhaputra āsīt. tasmāt tarhi bhikṣavo mama vacanaṃ śraddadhānair buddhe sagauravair bhavitavyaṃ dharme saṃghe sagauravair bhavitavyam. mātāpitṛṣu ācāryopādhyāyeṣu sagauravair bhavitavyam. evaṃ vo bhikṣavaḥ śikṣitavyam. この文脈から読めば、世尊の涅槃後という状況を特定する必要なく阿闍梨・和尚を尊ぶことは十分表明出来る。
- 19 Lévi [1932], p. 64, footnotes 1, 2 を見よ。
- 20 第5行目第一番目は左から母音記号の i と基字 n の上半分、第2番目の文字は上に r がはっきり見え、基字 v の上半分とその横に縦線、即ち母音記号 ā があるのが見える。第3, 4番目は文字があったことは読みとれるが、どのような文字かは分からない。第5番目の文字は上部に左から右に向かって弧を描く形が見え、おそらく母音記号 i であろう。
- 21 Pūrṇāvadāna が *Divyāvadāna* において中核的な物語であったこと、つまりこの物語と Śroṇakoṭīkarṇāvadāna の二つが基になって編纂されていたことについては岩本裕『佛教説話研究序説』（佛教説話研究第一巻）法蔵館，1967に詳しい。また、種々の文献に含まれる Pūrṇāvadāna を取り出して、翻訳・研究をした Joel Tatelman, *The Glorious Deeds of Pūrṇa: A Translation and Study of the Pūrṇāvadāna*, Curzon, 2000 が出版されている。